



読

んだ本より読んだ気になっている本の方がはるかに多い。せっかく退職して時間ができたのだから、ことに度々映像化されているような超有名古典は読んでから死ぬべし、とコツコツ読んでいる。とはいえ、とても余命で読み切れるような量ではないので、縁のあったものから少しずつというのが実情だ。その状態のまま寿命が尽きるとは思うが、まあそんなもんだらうと思う。

熱帯夜がうんざりするほど続き、夜中に目が覚めてしまうので、朗読で眠りに誘ってもらおうと考え、図書館からCDを借りてきた。江守徹の中島敦を聞いたから俄然読みたくなって、全集を借りた。卒業論文のテーマに全集の巻数が少ないというだけの理由で中島を選んだ友人のことを思い出した。

何十年ぶりに読んでみると、物語のおもしろさもさることながら、文体が実に小気味よいことに気づいた。漢学者の系譜に連なる人だから、馴染みのない漢語が頻出するが、不思議とイメージしやすく難しく感じない。

「悟浄出世」「悟浄歎異」は、「西遊記」に題材を得た短編小説である。沙悟浄の独白を中心に構成された作品なのだが、西遊記をこんな読み方ができたらどんなに楽しいだろうかと思った。実際作者には同じ視点

で書き続ける構想があったらしい。早世してしまったことがほんとうに惜しまれる。

中島敦に手を引かれる格好で、岩波文庫版『西遊記』を読み始めた。これこそ知った気になって読んでいない古典の最たるもので、小学生の時に児童用の簡略版で読んだ記憶だ。中野美代子訳岩波文庫は全十巻。訳注と頻繁に往復しながら不慣れな漢詩を読まされるものと覚悟してページをめくったが、そんな先入観は吹っ飛んだ。まるで落語なのだ。与太郎役のあほんだら猪八戒は、まぬけだのおたんちんだのとみんなから罵られるながら一向に悪びれる様子はない。八つつあん悟浄は、せっかち極まりなく周りを一顧だにせず突っ走る。教養のみでまったく無力の三蔵法師は長屋の隠居か。次々と手を替え品を替えて登場する化け物たちを相手に罵詈雑言の果ての大立ち回り。口承文芸として、市井の人々がどれほど楽しんだことだろうか、それを思うだけで胸が熱くなってくる。終わらせたくなくて次々膨らませていった結果としてのこの長さなのだろう。

いちばん地味でこれといった出番のない沙悟浄にじつと三人を観察させた中島敦の凄味。西遊記を読んでいると沙悟浄と中島敦が自ずと重なってくる。さてもありがたきご縁かな。死ぬ前に読めて何より重畳。

空き家 19

木幡智恵美

生家の思い出⑥

泉南から出雲に帰ったのは、小学校を卒業してすぐだった。父がある事情で会社に居られなくなり、母が務める会社の社長からの提案で、出雲で事業を始めることになったのだ。

私は家の近くにある中学校に進み、「ソフトボール部に一緒に入ろうね」と友だちと約束していたので、本当は田舎に帰りたくはなかった。毎日学校から帰ると、扉を伝って迎えに来てくれる愛猫タマと別れるのも嫌だった。けれども、半年ほど前から家の中で繰り返されるごたごたを目の前で見、肌で感じてきているので致し方ないことも分かっていた。

父は事業を立ち上げる準備で先に田舎へ帰り、母と私は荷物トラックに積み込まれた後、タマとお別れして駅に向かった。駅には親しい友だち数人が見送りに来てくれ、その中の一人と一緒に電車に乗り込み、隣に座ってくれた。その友だちが次の駅で降りると、別れが現実になったのか涙があふれだし、難波駅に着くまで泣き続けた。思い出の波が寄せる度に目頭が熱くなり、引いてもまた次の波が押し寄せ、寄せては返す波は家に着くまで続いた。

そして、田舎の家で、父と母、祖母と伯母、私の五人の生活が始まる。祖母とは小さい頃の何年か一緒に暮らしていたし、田舎に帰ると伯母とも過ごしていた。が、そこに暮らすとなると、一切が違っていった。土間があり、竈があり、部屋は襖や障子で仕切られるだけ。壁がなく、障子や襖を外すと家全体が一つの大きな部屋という感じだ。鍵っ子で、学校から帰ると一人で居ることが多かったせいか、いつも家の中に祖母や伯母が居るし、近所の人々が毎日のように来て茶飲み話が始まるという暮らしになかなか慣れなかった。一つ、ほつとしたことがある。庭に工場が建ったので、あの恐怖の便所が新しく作り替えられていたことだ。

中学校にはスクールバスで通った。旧小学校跡で待っていると、バスが来る。早便と遅便の二便があり、週ごとだったか月ごとだったかで交代で乗った。同級生が数人いたが、皆は小学校からの馴染みなので、自分からその中に入ることはできなかった、

家の環境から、友だちから、何もかもがすっかり変わり、異次元空間に彷徨っている感覚で、学校から帰ると海に向かった。水平線を眺めながら、ただひたすら歩き続けた。

30代フリーター フランスに研修に出かけた自民党女性局の国会議員らが、エッフェル塔の前で塔をまねたポーズをして撮った写真などをSNSに投稿し、「税金で観光旅行か」などと批判を浴びた。今月の朝日新聞の世論調査では「問題だ」が62%にのぼっている。

年金生活者 この種の批判に対しては決まって「そんな小さなことよりもっと大事な国政の問題があるだろう」という「大所高所」からの難癖がつけられる。だが、多くの国民は「そんな小さなこと」に敏感だ。そこに政治の「ゆるみ」を感じ取り、自分たちがなめられていると受け取るからだ。

2009年に自民党が民主党に政権を奪われたのは、当時の麻生内閣で閣僚らの力ネがらみの不祥事が相次いだことが大きな要因だった。国民はこの内閣の「ゆるみ」を察知して怒ると同時に、リーマン・ショックで広がった世界金融危機への政権の対処能力に不安を覚えたと推察される。

政権選択の選挙で基本路線の違う党と協力することなどできない、と野党共闘を否定する主張は根強くある。基本路線と個別の方針、将来ビジョンと当面の課題を短絡させるこの種の主張は、裏に別の意図があるか、認識が幼児的か、いずれかだ。

30代 野党がバラバラの今、政権交代にかつてのような現実味はない。

年金 英国の2大政党による政権交代は、資本家と労働者というふたつの階級を代表する政党の存在によって成り立っている。この2大階級を生んだのは、製造業を牽引車とする産業資本主義であり、それが第3次産業中心のポスト産業資本主義に取って代わられるにつれて、2大政党の議席占有率は漸減傾向をたどり、時代とのずれが生じ始めた。

産業資本主義は均質な労働力を必要とする。労働者どうしは労働の性質も待遇も似かよっていて比較的平等が保たれる。それが労働者階級という大きなひとかたまりの階級を生んだ。これ

30代 ところが、そのあとの民主党政権は3年3カ月で倒れた。

年金 自民党の「ゆるみ」はおごりから出たものだった。それは挑まれる者としての「ゆるみ」だった。これに対し、民主党政権は挑む者としての「ゆるみ」によって瓦解した。彼らは「国民の生活が第一」「官僚主導から政治主導へ」を掲げ、自民党と霞が関が築き上げたシステムに挑んだが、官僚の抵抗に遭って公約破りに走った。国民は自民党以上に国民をなめていると感じたに違いない。

自民党が「利害」によって結束した政党だとすれば、それに挑んだ民主党は「理念」によって結束しなければならぬはずだった。「国民の生活が第一」「官僚主導から政治主導へ」はそうした「理念」になり得ると期待されたが、あっさり裏切られた。

自民党の政策も民主党の政策も、内政では市場経済を前提にし、外交では日米同盟を基軸にしている点では根本的な違いはなかった。国民はそれを前

に対し、ポスト産業資本主義では、労働の性質も待遇も格段に多様化し、労働者のあいだにも格差が広がった。労働者にはもはやひとつの階級とは言えないくらい多様になった。

こんな時代に日本で2大政党による政権交代が定着する可能性はきわめて低い。民主党政権が成立したとき、そんな時代が来るかに見えたが、政権のつまずきでその期待はしぼんだ。代

提にしたうえで、政策を実行する手段と能力を見比べて政権選択の判断をした。「ゆるみ」は手段の緻密さと実行力を削ぐ大きな要因と受け取られた。

自民党の「ゆるみ」が「利害」にまつわるものだったとすれば、民主党のそれは「理念」にかかわるものだった。国民はそのどちらも許さなかった。

30代 旧ツイッター（現X）で、小沢一郎（事務所）がしきりに自民党を「利権政治」と批判している。

年金 麻生内閣が民主党に倒されたのは、政策上の錯誤ではなく、相次ぐ不祥事が大きな要因だったことが物語るように、不祥事の追求は政権交代に至る「王道」と言わなければならない。

3度目の政権交代に執念を燃やす小沢一郎が共産党との選挙協力に積極的なのは、基本路線が違って不祥事の追求は共にすることができからだ。それで自民党を倒して新政権をつくっても、路線の違いは棚上げすれば何も困ることはない。

わって、維新の会の伸長など野党の多様化が進んだ。

日本でこの先もし政権交代があるとしたら、ドイツやフランス、イタリアのように、過半数に満たない政党どうしの連立によるものとなるだろう。現在の資本主義がそれを強いるからだ。

小沢一郎が「野党候補の一本化で政権交代を実現する有志の会」をつくったのはそうした時代認識に基づいている。

30代 自分たちを「第2自民党でない」と発言した日本維新の会代表の馬場伸幸は「自民党と維新の2大政党制にして、政権奪取の争いをやっていきたい」と言っている（7月26日時事通信）。

年金 時代からずれた考えというほかない。そればかりか、アメリカの2大政党でさえ、かつての資本家と労働者の階級対立の延長線上に存続し得ていることを無視して、保守どうしの2大政党を主張しており、二重の錯誤をおかしている。

ニュース日記 889
中村 礼治

政権交代はなぜ起きるか